

令和元年6月28日現在

機関番号：25502

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K21306

研究課題名(和文) 診断概念「状況的危機」に関連した看護診断の開発

研究課題名(英文) Development of nursing diagnosis related to diagnostic concept "situational crisis"

研究代表者

田中 周平 (Tanaka, Shuhei)

山口県立大学・看護栄養学部・講師

研究者番号：50382388

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、「危機」に関連した看護診断の開発に向けて、既存のNANDA-I看護診断の現状分析を行い、危機介入を効果的に実施するためには新たな看護診断の開発を行う必要があることを明らかにした。また、看護における「危機」の概念構成を明らかにすることを目的として、概念分析を行った。概念構築の背景、関連概念との相違、属性、モデル例の提示、先行要件と結果を明らかにし、概念の定義を検討した。その結果を基に、開発した看護診断の構成要素(診断名、定義、診断指標または危険因子、関連因子)についてコンセンサスを得るための国内のエキスパートナースを対象とした調査用紙を作成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「危機」を診断概念とした新たな看護診断の開発の可能性が示唆されたことにより、開発した新たな看護診断を国内および国外に向けて発信することが可能となる。さらに、研究が進むことで開発した看護診断の信頼性や妥当性を向上させることが可能となる。また、今後、開発した看護診断を用いた心理的な危機状態にある患者やその家族への系統的な看護介入を行うことが容易になることが期待される。

研究成果の概要(英文)：In this research, we analyzed the current status of existing NANDA-I nursing diagnosis for the development of nursing diagnosis related to "crisis". The results of the present study provided the need to develop new nursing diagnosis to effectively implement crisis intervention. In addition, concept analysis was conducted with the purpose of clarifying the conceptual structure of "crisis" in nursing. The background of the concept construction, differences with related concepts, attributes, presentation of model examples, antecedents and results were clarified. Based on the results, we created a survey form for domestic expert nurses to gain a consensus on the components (diagnosis labels, definitions, defining characteristics or risk factors, related factors) of the nursing diagnosis we developed.

研究分野：救急・クリティカルケア看護

キーワード：看護診断

様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

(1) 看護診断は看護過程の要素であり、臨床現場では NANDA インターナショナル (NANDA-International: NANDA-I)¹⁾の看護診断分類が広く活用されている。しかし、看護師の教育背景、看護診断についての知識、教育レベルや経験年数に関係なく、看護診断に沿った看護実践があまり行われていない現状である。看護診断は患者ケアを個別化するための最善の手段との一致した見解がある一方で、臨床看護師には看護診断の前提や特徴が支持されていないことも指摘されている。しかし、現在も看護診断用語は開発途上であり、わが国においても青木ら²⁾、永田³⁾によって新たな看護診断の開発が行われ、NANDA-I に提案・採択されている。

(2) 「危機 (crisis)」とは、人が人生の大切な目標に向かうときに障害に直面した場合、習慣的な問題解決の方法を用いても克服できない結果が発生する状態のことを指す。臨床現場では、生命の危機状態にある患者やその家族は程度の差はあるにしても心理的な危機にあることが多く、何らかの危機介入を必要とする。そのため、系統的な人間理解の重要性が強調され、看護師による危機状態へのアプローチの必要性が謳われている。わが国では、危機理論や危機モデルを用いた研究、あるいは危機介入に関する研究は多くみられるが、危機モデルを実際の患者やその家族にあてはめて使うような研究が多い⁴⁾。また、分野としても救急看護やクリティカルケア看護、精神看護における研究がほとんどであり、これらの分野以外では危機に関する先行研究は少ない⁵⁾。

(3) 看護診断は、「実在または潜在する健康問題／生命過程に対する個人・家族・地域社会の経験／反応についての臨床判断である」と定義されており、「危機」は、身体疾患の発病や悪化、外傷で生命や安全が脅かされることによって現れる、人間の経験／反応であると言える。また、アイオワ大学の看護介入分類 (Nursing Interventions Classification: NIC)⁶⁾には『危機介入 (Crisis Intervention)』が含まれている。NIC『危機介入』は、「患者が危機に対処し、危機の前と同じか、またはそれ以上よい機能状態に回復できるように、短期カウンセリングを用いること」と定義されている。系統的なアプローチを必要とする心理的な危機状態に対して、系統的なアプローチの手法である看護診断に基づいた看護介入は有効であるといえる。しかし、先行研究では心理的な危機状態の看護診断に焦点を当てた研究はほとんど行われていない⁷⁾。したがって、看護に関わるべき患者現象である「状況的危機 (situational crisis)」に関する新たな看護診断の開発が求められる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、「状況的危機」を診断概念として、実在型およびリスク型看護診断を開発することであった。本研究の構成要素としては、大きく3つの研究目的から成り立つものとした。

(1) NANDA-I の「新しい診断の提案過程」に基づいて [診断名、定義、診断指標または危険因子、関連因子、文献] を開発する。

(2) 「状況的危機」の [概念分析] を行うことで、開発した看護診断の根拠レベルを向上させる。

(3) [エキスパートナース (専門家) を使った診断に関するコンセンサス研究] によって、開発した看護診断の評価を行う。

3. 研究の方法

本研究は、「状況的危機」を診断概念として、実在型およびリスク型看護診断を開発することを目的としていたが、研究の過程において、より広義において分析する必要が生じたため、より中立でニュートラルな意味である「危機」を診断概念とすることにした。そのため、当初の研究計画および方法を再検討し、修正を行った。

(1) 「危機」に関連した看護診断の開発に向けて、既存の NANDA-I 看護診断における「危機」の位置づけを明らかにすることを目的とした文献研究を行った。NANDA-I 看護診断、定義と分類 2012-2014 が示す看護診断の開発に基づいて、最新の NANDA-I 看護診断、定義と分類 2015-2017 から、「危機」という用語が含まれる、または「危機」という状況を説明する概念である「コーピング」を定義に含む診断名と定義、診断指標または危険因子、関連因子を抽出・分析した。また、リンケージされている看護成果分類 (Nursing Outcomes Classification :NOC)、看護介入分類 (NIC) についても抽出・分析を行った。

(2) 診断概念「危機」をキーワードとして文献検索・検討を行い、実在型およびリスク型看護診断の [診断名、定義、診断指標または危険因子、関連因子、文献] を検討した。さらに看護用語体系 (看護成果分類・看護介入分類) から開発した診断に適切な例を選定した。入手可能なものすべて (言語辞典、書籍、先行研究論文、総説、資料等) を対象として分析を行った。海外文献の選定については、CINAHL (Cumulative Index to Nursing & Allied) を用い、「crisis」をキーワードとする学術専門誌に掲載された抄録のある文献を、また、国内文献は医中誌 Web で検

索し、「危機」をキーワードとする原著論文で抄録のある文献を分析対象とした。

(3) [概念分析]として、看護における「危機」の概念を分析し、定義を検討して明らかにすることを目的とした文献研究を行った。同様に国内外の成書や文献を対象に、概念の構成を明らかにするため、Walker & Avant (2005/2008)⁸⁾の概念分析の方法に基づいて、概念構築の背景、関連概念との相違、属性、モデル例の提示、先行要件と結果を明らかにし、概念の定義を検討した。概念構築の背景の検討と関連概念との相違の検討には、分析対象の論文以外にも「危機」に関する成書と解説書も加えて検討を行った。「危機」の一般的な用法については、辞書、参考図書を検討した。

(4) エキスパートナースを対象とした[コンセンサス研究]として、質問紙調査法を用いて開発した看護診断の評価を行うこととした。国内の医療施設に勤務する救急・クリティカルケア分野の看護師を対象に郵送法による質問紙調査を行うこととした。これにより開発した診断の構成要素(診断名、定義、診断指標または危険因子、関連因子)についてのコンセンサスを得ることを目指した。コンセンサスの得られた構成要素を臨床現場で実際に使用し、「危機」にある対象に遭遇する可能性が高い救急・クリティカルケア分野の看護師を対象に開発した診断の評価を行う予定であった。

4. 研究成果

(1) 「危機」に関連した看護診断の開発に向けて、既存のNANDA-I看護診断における「危機」の位置づけを明らかにすることを目的とした。「危機」という用語を関連因子を含む看護診断やNICとして『危機介入』、『コーピング強化』、『カウンセリング』がリンケージされている看護診断が認められた。また、「危機」に関連したNOCとしては、[コーピング]、[家族のコーピング]、[カウンセリング]等がリンケージされていた。しかし、「危機」に関連した診断名は存在しているものの、「危機」の定義や概念に合致する看護診断は存在していなかった。危機介入を効果的に実施するためには、「危機」に関連した新たな看護診断の開発の可能性が示唆された。

(2) 既存のNANDA-I看護診断の現状分析を行った結果、看護介入の重要な根拠となる関連因子の実態からも、「危機」は看護に関わるべき患者現象であり、介入可能であることが確認された。そのため、看護診断の開発に着手し、新たな看護診断として、実在型およびリスク型看護診断の構成要素(診断名、定義、診断指標または危険因子、関連因子)を検討した。結果として、新たな看護診断案を抽出することはできたが、まだ検討中であり公表する段階に至っていない。

(3) Walker & Avantの概念分析の結果、看護における「危機」の概念構築の背景、関連概念との相違、属性、モデル例の提示、先行要件と結果を明らかにし、概念の定義を明らかにした。同時に、[コンセンサス研究]として実施予定の調査研究における項目等の調査用紙の作成を行ったが、その過程において概念分析の結果についても再検討を行った。そのため、詳細については内容を再検討しており公表する段階に至っていない。

(4) 研究の過程において、対象とする診断概念の見直しを行ったため、当初の研究計画および方法の修正を行う必要あり、研究の進捗状況が遅延した。そのため、[コンセンサス研究]においては実施に至らず、看護における「危機」の概念分析の結果に基づいた調査用紙の作成・検討段階に留まっている。今後、作成した調査用紙を用いて、「危機」にある対象に遭遇する可能性が高い救急・クリティカルケア分野の看護師を対象にコンセンサスを得るための調査を行うとともに、その構成要素(診断名、定義、診断指標または危険因子、関連因子)を臨床現場で実際に使用し、開発した診断の評価を行うことを予定している。

<引用文献>

- ① NANDA-International, 2012/日本看護診断学会:NANDA-I看護診断 定義と分類 2012-2014、医学書院、東京、2012
- ② 青木康子、片山美都子他:日本初のNANDA-I看護診断について(第1報)、看護診断、14(2)、2009、254-255
- ③ 永田明:診断概念「衝動コントロール」に関連した看護診断開発、看護診断、15(2)、2010、106-107
- ④ 山勢博彰、山勢善江:救急看護における研究の動向と今後の課題、看護研究、33(6)、2000、11-25
- ⑤ 山勢博彰:わが国のクリティカルケア看護に関する研究の動向、看護研究、38(2)、2005、3-15
- ⑥ Bulechek, G. M., Butcher, H. K., Dochterman, J. M.: Nursing Interventions Classification (NIC) 5th Edition, 2008/中木高夫、黒田裕子訳:看護介入分類(NIC)、南江堂、東京、2009
- ⑦ 田中周平、山勢博彰:クリティカルケア看護領域における状況的危機に対する心理社会的看

護診断の実態、看護診断、13 (1)、2008、48-56

- ⑧ Walker, L. O., Avant, K. C. : Strategies for Theory Construction in Nursing 4th Edition, 2005 / 中木高夫、川崎修一訳 : 看護における理論構築の方法、医学書院、東京、2008

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計1件)

- ① 田中周平、永田明、山勢博彰 : 「危機」に関連した看護診断開発に向けた既存の NANDA-I 看護診断の検討、看護診断、査読有、23 巻 1 号、2018、12-22

[学会発表] (計1件)

- ① 田中周平 : 「危機」に関連した看護診断開発に向けた既存の看護診断の検討、第 23 回日本看護診断学会学術大会、2017

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称 :

発明者 :

権利者 :

種類 :

番号 :

出願年 :

国内外の別 :

○取得状況 (計0件)

名称 :

発明者 :

権利者 :

種類 :

番号 :

取得年 :

国内外の別 :

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名 :

ローマ字氏名 :

所属研究機関名 :

部局名 :

職名 :

研究者番号 (8 桁) :

(2) 研究協力者

研究協力者氏名 : 永田 明

ローマ字氏名 : NAGATA Akira

研究協力者氏名 : 山勢 博彰

ローマ字氏名 : YAMASE Hiroaki

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。